



国立国語研究所共同研究プロジェクト

「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム

A symposium on “Research on Literacy of Immigrants in Japan”

A collaborative research project of the National Institute for Japanese Language and Linguistics
(NINJAL)

「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へ

—中国・サハリン帰国者の事例から—

FROM “LITERACY IN SCHOOL” TO “LITERACY AS A SOCIAL PRACTICE”:
CASE STUDIES OF RETURNEES FROM CHINA AND SAKHALIN

予稿集

Proceedings

2023 年 3 月 12 日

主催：国立国語研究所共同研究サブプロジェクト「定住外国人のよみかき研究」

共催：国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」

開催場所：早稲田大学 早稲田キャンパス 6 号館 301 教室

Organized by: “Research on Literacy of Immigrants in Japan,” a collaborative research project of the NINJAL

Co-organized by “A Multifaceted Study of Language Problems in Multilingual and Multicultural Japan,” a collaborative research project of the NINJAL

Venue: Room 301, Bldg. 6, Waseda Campus, Waseda University

プログラム

9:30 開場・受付開始

10:00-10:15 開会の辞・趣旨説明 福永由佳(国立国語研究所)

第1部

10:20-12:00 講演:移民のよみかき戦略ー英語圏における新識字研究の展開から

角 知行(天理大学)

第2部

パネルディスカッション:生活者としての中国・サハリン帰国者の事例からよみかき実践を考える

13:15-13:25 趣旨説明:福永由佳(国立国語研究所)

13:30-13:50 1:文字を媒介としたコミュニケーションの意義

ー中国帰国者のよみかき実践を事例としてー

池上摩希子(早稲田大学)

13:55-14:25 2:団地とよみかき実践ー中国帰国者3世代の語りから

高民定(千葉大学)

14:30-14:50 3:サハリン帰国者ー世代によって異なる母語と「帰国」後の日本語学習

パイチャゼ スヴェトラナ(北海道大学)

14:55-15:40 全体ディスカッション

ディスカッサント 村岡英裕(千葉大学)

16:00 終了(閉室)

Program:

10:00 – 10:15 AM

Opening remarks and an explanation of the day's events: Yuka FUKUNAGA (NINJAL)

Part 1 10:20 AM – 12:00 PM Lecture

Immigrants' Strategies of Literacy: Based on Developments of New Literacy Studies in English-speaking Countries

Tomoyuki SUMI (Tenri University)

Part 2 1:15 – 3:40 PM Panel Discussion

The Practice of Literacy based on Case Studies of Returnees from China and Sakhalin

1:15 – 1:25 PM

An explanation of the day's events: Yuka FUKUNAGA (NINJAL)

1:30 – 1:50 PM

1. The Significance of Communication through Writing: A Case Study of Japanese Literacy among Returnees from China
Makiko IKEGAMI (Waseda University)

1:55 – 2:25 PM

2. A life of housing complex('Danchi') and Japanese literacy practice among foreign residents: based on the narrative of three generations of returnees from China
Minjeong KO (Chiba University)

2:30 – 2:50 PM

3. Sakhalin returnees - different mother tongues depending on generations and learning the Japanese language after "return" to Japan.
Svetlana PAICHADZE (Hokkaido University)

2:55 – 3:40 PM

Discussant: Hidehiro MURAOKA (Chiba University)

4:00 PM Symposium concludes (Room closed)

概要

日本で働き、学び、子育てをしながら、長期的に生活を営む外国にルーツのある人たち（定住外国人）は、日本語学習の機会が少ないのにも関わらず、日常生活のさまざまな場面で日本語のよみかきが求められています。では、彼らはどのように対応しているのでしょうか。彼らの「字をよみかきする社会的実践」(literacy as a social practice)は、これまで日本語教育の研究対象としては注目されることは少なく、支援の取り組みも諸外国に比べ立ち遅れていることが指摘されています。本プロジェクトでは、彼らの生活のなかにあるよみかき実践に目を向け、彼らのよみかき実践に対する価値観、方略、問題意識、社会参加との関係についての理解を目指します。そして、従来の「識字」に内在する諸課題を明らかにし、よみかきに関する価値観の更新と新たなよみかき支援への提案を試みます。今回のシンポジウムでは、まず諸外国の研究動向をご紹介します。続いて、パネルディスカッションでは、生活者としての中国・サハリン帰国者の事例からよみかき実践について議論を深めます。

問い合わせ先

シンポジウム事務局

E-mail: yomikaki.ninjal@gmail.com

国立国語研究所共同研究プロジェクト

「定住外国人のよみかき研究」プロジェクト・リーダー

福永由佳（国語研究所研究系准教授）

E-mail : ynonami@ninjal.ac.jp

ご注意ください

*申し込み時にいただいた個人情報は、個人情報保護ポリシーに則り厳正に取り扱います。

*発表タイトルは変更される可能性がありますので予めご了承下さい。

*会場では、マスクの着用と手指消毒にご協力ください。

*早稲田キャンパス 6 号館会場にはエレベーターがありません。階段をご利用ください。

*ごみのお持ち帰りにご協力ください。

Summary:

People of foreign origin who work, study, raise children, and live in Japan for a long period of time (foreign residents) must read and write Japanese in various situations in their daily lives even though they have few opportunities to learn Japanese. How do they cope with these situations? Their “literacy as a social practice” has seldom not been the focus of much attention as a subject of research on Japanese language education and that efforts to assist them have lagged behind those in other countries. Our project will focus on literacy as a social practice in the daily lives of foreign residents, and it seeks to understand their views, strategies to become literate in Japanese, their awareness of issues, and their social participation. Our project also attempts to identify various issues inherent in conventional “literacy in school,” to update views on literacy in Japanese, and to propose new forms of literacy assistance. This symposium will start by describing trends of studies in English-speaking countries. Next, a panel discussion will further discuss the practice of literacy based on case studies of returnees from China and Sakhalin, China.

matters that require attention

- The titles of presentations are subject to change.
- Bldg. 6, Waseda Campus of Waseda University does not have an elevator. Please use the stairs.
- Please wear a mask and use hand sanitizer at the venue.
- Please take any trash with you.

Inquiries

Symposium Office

e-mail : yomikaki.ninjal@gmail.com

Sub-Project Leader

Yuka FUKUNAGA (National Institute for Japanese Language and Linguistics: Associate Professor)

e-mail : ynonami@ninjal.ac.jp

第一部 講演

移民のよみかき戦略—英語圏の新識字研究の展開から(要旨)

角 知行

近年、超多様性(superdiversity)社会の到来といわれるほど、国家間での人の移動が増加している。またデジタル化の発展によって、コミュニケーション活動にもラジカルな質的、量的変化が生じている。こうした事態とともに、識字研究にもあらたな動きがみられる。

イギリス・アメリカなどの英語圏の国々では、1980年代より、個人的な能力ではなく、社会的実践としてリテラシー(識字、よみかき)を研究する「新識字研究(New Literacy Studies)」といわれる潮流がおこってきた。これは、「よみかき実践(literacy practice)」という概念を手がかりに、言語少数者をふくむコミュニティ、あるいはスマホやパソコンによるバーチャルな現実を、エスノグラフィックに調査研究するものである。ほぼ同時期に心理学や社会学の分野で「ナラティブ・ターン(物語的転回)」といわれる知的変動が生じていたが、これと方向性を共有するものであったといえる。

今回の報告では、移民がどのようなよみかき戦略をもって移住した現地語に対応しているのか、「移民のよみかき戦略」という観点から新識字研究の最近の成果をいくつか紹介したい。通訳、支援者といった人的資源の利用、機械翻訳等による母語や言語変種テキストの利用、現地語学習のためのスポンサーの利用といった戦略の事例を順次とりあげる。最後に、その意義と限界を考察する。

日本も、定住者や永住者がふえ、実質的に移民国家化しつつあるといわれる。母語や生活をふくむ、移民の視点にたった言語活動の解明が求められる。そうした調査研究のささやかな参考になれば幸いである。

参考文献

すみ・ともゆき: 角知行 (2012) 『識字神話をとみとく—「識字率 99%」の国・日本というイデオロギー』明石書店

パーベン・ウタ: Papen, Uta (2005) *Adult Literacy as Social Practice: More than Skills*, Routledge

マーティンジョーンズ・マリーン／マーティン・デイドル: Martin-Jones, Marilyn and Martin, Deidre(ed.) (2017) *Researching Multilingualism: Critical and Ethnographic Perspectives*, Routledge

ローセル・ジェニファー／パール・ケイト: Rowsell, Jennifer and Pahl, Kate (ed.)(2015) *The Routledge Handbook of Literacy Studies*, Routledge

第2部 パネルディスカッション

生活者としての中国・サハリン帰国者の事例から

よみかき実践を考える

趣旨説明 福永由佳（国立国語研究所）

1. 文字を媒介としたコミュニケーションの意義

ー中国帰国者のよみかき実践を事例としてー

池上摩希子（早稲田大学）

2. 団地とよみかき実践ー中国帰国者3世代の語りから

高民定（千葉大学）

3. サハリン帰国者ー世代によって異なる母語と「帰国」後の日本語学習

パイチャゼ スヴェトラナ（北海道大学）

全体ディスカッション

ディスカッサント 村岡英裕（千葉大学）

パネル1

文字を媒介としたコミュニケーションの意義

—中国帰国者のよみかき実践を事例として—

池上摩希子(早稲田大学)

日本で生活する外国人が増加するなか、かれらがどのようにして日本社会に参加しているかが注目される。発表者は中国帰国者定着促進センター(当時)において、日本に定住する中国帰国者とその家族に対して、「初期集中適応指導」の実践を行った経験がある。本発表では、この実践事例から、文字を媒介としたコミュニケーションの意義を問い直したいと考える。

事例からは、中国語でのよみかきも大変な人が日本語でよみかきする必要があるのか、中国語でよみかきができて日本語では十全でなければ社会参加は困難なのか、こうした問いが立てられる。しかしそれに対しては、「よみかきができるとは、つまりは、何ができることなのか」という問い直しを行い、それによって、リテラシーの今日的な意味に接近したい。

リテラシーが単によみかきに関する知識や技術の有無を言うものではなく、そうした技能をもって当事者が社会に参加し、それを機能的に用いる能力や社会と相互作用を行う能力、さらには社会を批判的にみる能力をいうのであれば、当事者である学習者が参加する社会とはどのような様相を呈しているのか、そこで行われる相互作用とはどういったものであるのかの検証が求められる。よみかきができるということは、より多くの情報へのアクセスが可能になり、生活の質を高められることにとどまらない。文字を媒介にしたコミュニケーションが行えることで、伝える・伝えられることができ、自己表現と他者理解ができることにつながる。これは、よみかき実践においては、「学習すること」が自分の生活と世界の拡張を導く点、教室がことばの学習のためだけにあるものではない点、この2点を留意すべきことを示唆している。

隣人として生活する外国人のよみかき実践を支えるためにも、今ここで中国・サハリン帰国者の事例を語り、聴く意義は小さくない。日本社会が「移民」の存在を認めるかどうかに関わらず、「移民」的な存在であり、日本語を第二言語として学習したかれらのよみかき実践から学べることは多いと考えるからである。

参考文献

Wallerstein, N. (1983) Language and Culture in Conflict; Problem-Posing in the ESL Classroom. Addison-Wesley Publishing Company

パネル2

団地とよみかき実践：中国帰国者3世代の語りから

高民定(千葉大学)

中国帰国者が日本で定着するためには、何よりも安定した居住環境を確保することが欠かせない。そのため日本の政府や地方公共団体は、帰国者に対する支援法(1994)¹に基づき、公営住宅の優先入居や家賃の減免等の住宅支援を実施してきた。そうした施策もあり、現在全国の公営団地には多くの中国帰国者が居住しており、居住年数が30年以上の高齢帰国者もいれば、5年未満の比較的若い帰国者もいて多様な世代が混在している。彼らの団地生活や地域社会への適応をとらえた研究も少なくない。(e.g.趙萍ら1999、丁ら2022)。

なかでも丁ら(2022)は団地に居住する高齢中国帰国者の住環境を調べており、その結果、高齢帰国者の多くは中国人や帰国者の隣人との私的つながりを持っているのみで、社会的つながりや社会参加の程度は非常に弱いレベルにあると指摘している。また、発表者が行った外国人集住地域の調査(e.g.高2019)では、団地に居住する外国人住民は自治会活動をはじめ、地域住民との交流活動など、団地での生活や社会参加に必要な様々なよみかき実践を求められていることが明らかになっている。

本発表では、中国帰国者の言語環境のベースとなる団地という住環境とコミュニティに注目しながら、その社会的、生活的な文脈の中において、どのように文字を介したコミュニケーションを行っているか、またその際、どのように自らのよみかきを捉えているかを考察する。具体的には、帰国者としてのルーツ、来日時期、使用する言語リソースが異なる三世代(二、三、四世)の事例を取り上げたい。

事例紹介にあたってはこれまで行ってきた団地周辺の言語環境や団地生活のよみかき実態を把握するための質問紙調査と、当事者へのインタビュー調査の資料を参考にする。それぞれの帰国者の生活の語りからは、異なる世代の異なるよみかき実践はもちろんのこと、よみかきの実践に向かう当事者の蓄積された言語管理の様子もうかがうことができ、彼らのコミュニティとの関わりや社会参加の方法を理解する手がかりになると思われる。またそうしたよみかき実践に見られる言語管理の特徴を考えることは、他の外国人住民のよみかき実践や言語問題、支援課題を考えるうえでも重要な示唆を与えるものと思われる。

参考文献

丁 文磊・松原茂樹・下田元毅・木多道宏(2022)「高齢中国帰国者の環境移行と住環境の実態に関する研究：中国残留邦人一世・二世とその配偶者を対象とした調査を通して」『日本建築学会計画系論文集』87-793, pp.487-498

高民定(2019)「外国人居住者の言語環境とリテラシー問題：日本の外国人集住地域の事例

¹ 2007年に改善された帰国者関連の法律「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進並びに永住帰国した中国残留邦人等及び特定配偶者の自立の支援に関する法律」(1994)は、公営住宅の優先入居支援を帰国者一世に限定しており、二世とその配偶者は支援法の対象外としている。

分析を中心に」『千葉大学人文公共学研究論集』38 pp.92-107

パネル3

サハリン帰国者―世代によって異なる母語と「帰国」後の日本語学習

パイチャゼ スヴェトラナ (北海道大学)

1946年から1949年にかけて樺太(サハリン)に在住していた日本人の引き揚げが行われた。しかし、引き揚げられない日本人も少なくなかった。それは主に、抑留者や製紙工場等で専門職に就いていた者、引き揚げの対象にならなかった朝鮮人と婚姻関係を結んだ日本人女性である。このようにさまざまな理由によって帰国ができなかった「サハリン残留日本人」が生まれることになった。1990年以降に日本に帰った「サハリン残留日本人」やかれらの子孫(2世・3世)を「サハリン帰国者」と呼ぶ。かれらの主な移住先である北海道には現在200人以上が暮らしている。

「サハリン帰国者」は中国帰国者と類似した問題を抱えるが、歴史的な経緯から生まれた異なる事情がある。それは、まず「サハリン帰国者」の家族には日本人だけではなく、帝国日本の時代に自発的・強制的に樺太に移動し、残留した朝鮮人もいることである。すなわち、かれらには日本とロシアのみならず、朝鮮半島の言語・文化も見られるのである。

引き揚げ者の世代によって、第一言語(最も強い言語)は異なる。例えば、戦前、樺太では日本人と朝鮮人は同じく日本人学校に通っていたため、かれらの第一言語は日本語であった。1949年に日本人の引き揚げが終わると、日本人学校が閉鎖され、日朝家庭の子どもたち(養子を含む)は朝鮮人学校に通うことになった。この世代の主な言語は朝鮮語(韓国語)である。1963年に朝鮮人学校が閉鎖され、サハリンではロシア語化が進み、次の世代は主にロシア語を使用することになった。

本発表では、日本への帰国後、母語・第一言語が日本語習得にどのような影響を与えているかを考察する。例えば、朝鮮語が母語である2世が日本語を習得する場合、両言語の文法や語彙が類似していることから容易に日本語を学習する傾向がみられる。しかし、3世の「サハリン帰国者」はロシア語、すなわち「非漢字圏言語」の母語話者であるため日本語の習得には困難が伴う。

全体ディスカッション

ディスカッサント：村岡英裕（千葉大学）

アンケートのお願い

参加して下さった皆さまには、アンケートにご協力いただけましたら、幸いに存じます。
本シンポジウムへのご意見, ご感想をお寄せください。



